

福島県の念仏芸能

本田 郁子

Nenbutsu-Dancing in Fukushima Prefecture

by

Ikuko Honda

I 序 論

1980年代を迎えた今日、環境科学の領域では、人間が快適に生活していくための環境を物質あるいはエネルギーという二つの尺度で把握しようとしてきた70年代までの考え方に対し、人間の「心」の問題に焦点をあて人間のコミュニケーションや文化という環境の重要性が見直されつつあるように思われる。¹⁾物質的・エネルギー的には高度に満たされているが、近代化に伴う文化的環境の破壊は人間の精神世界の荒廃や連帯感の喪失というような深刻な問題を引き起こしてきたことが、環境科学だけでなくあらゆる分野から指摘されてきている。このような環境破壊は今日急速に進行しつつあり、人間にとって本来望ましい文化的環境の保全と回復は重要かつ緊急な課題といえよう。

こうした状況の中で、最近祭りや郷土芸能といったものへの渴望・再評価は目ざましいものがあり、全国各地で復興・再創造のきざしを見せている。この現象は単なる懐古趣味による一時的な流行ではなく、文化的環境の破壊によって欠乏した栄養素に対する必然的な欲求の現れとして捉えることができるのではないだろうか。

本研究は、文化的環境の保全と回復のための一方法として「地域社会における祭りや郷土芸能の復興と再創造」をめざし、環境開発の影響が比較的少なく地域社会に根ざしながら現代に生きる地域芸能に対する評価から出発する。そして地域に固有な芸能の芸能態を明らかにするとともに地域社会と芸能伝承との関係を比較考察しつつ、社会における郷土芸能の存在意義と現代化の方向を探ることを目的とするものである。このねらいから、研究領域としては舞踊学や民俗学といった従来の研究領域に加えて、文化人類学や生態学、情報科学などこれまでの芸能研究には顔なじみの薄い学問領域からもその発想法や手法を必要に応じて導入している。研究対象としては、「念仏」が民間信仰として地域共同体に定着し、芸能化の過程において地域ごとに様々な変容を見せている福島県下の念仏芸能に着目した。

以下に、昭和53年から56年まで20数回にわたる現地での野外調査・取材（芸能の収録、芸能の習得、面接調査、文献調査など）と、収録したVTRおよび8mmフィルムの分析により得られた結果について考察する。

II 福島県下における念仏芸能の伝承状態

(1) 環 境²⁾

まず、本研究の対象地域である福島県について簡単に触れておこう。

福島県は東北地方の最南部に位置し、面積は都道府県中第3位という広大な県域を擁している。地形的に見ると福島県は三つの地域に分かれており、一つの県とは思えないほど地域ごとに自然条件を異にしている。

南北に細長く伸び太平洋に面した低地は「浜通り地方」と呼ばれ、一般に冬期の積雪量は少なく東北地方では最も温暖な地域である。次に、奥羽山脈と阿武隈山地にはさまれた地域は「中通り地方」と呼ばれ、海から隔てられているため内陸的な気候の特徴を示し、日較差が大きい。さらに、奥羽山脈の西側に盆地を形成している「会津地方」は、激しい内陸性を示すとともに冬は積雪が多く冷え込みも厳しいという特徴を持っている。

歴史的に見ると、現在の福島県の風土の形成に大きな影響を与えたものとして江戸時代の幕藩体制が目される。交通の要所である、白河の関、勿来の関を擁する中通り地方、浜通り地方は、東北地方に配された外様の大大名をけん制するため、譜代・親藩の大名が置かれしかも小藩が分立し、配置替えも頻繁であった。このように一個の大藩の支配をまぬがれた両地方は、封建領主の支配と規制が比較的ゆるやかであるという好条件を獲得した。これによって東北地方としては順調な産業の発達を享受することができたといわれている。³⁾

一方、会津地方は会津松平藩23万石として一つにまとまり、独自の武士道を形成していった。幕末の戊辰戦争における会津藩の悲劇的な最期は有名である。

現在、県内の中心的産業は農業であるが、常磐・郡山地区をはじめ近年の工業の伸びは目ざましいものがあり、山岳・丘陵地帯でも急速に開発事業が進められている。にもかかわらず、阿武隈山地の山麓や奥深い南会津の谷合いには、依然として開発の手に染まらず旧態をとどめている地域もいくつか残されているといわれている。

(2) 念仏芸能の分布

現在全国に伝承されている念仏芸能の芸能は、一般に「念仏や和讃を唱えて、鉦、太鼓、瓢箪⁴⁾その他のものを打ち鳴らして盆や仏事に際して寺や踊堂または辻や民家の庭などで行なわれるもの」と説明されている。その分布は全国にわたっており、中でも福島県、京都府、中部地方に数多く伝承されているといわれる。⁵⁾

図1に示すように、野外調査および文献調査の結果、福島県には「会津大念仏^{あいつだいねんぶつ}」「空也念仏^{くうやねんぶつ}」(会津地方)、「天道念仏^{てんとうねんぶつ}」「南須釜念仏おどり^{みなすかまねんぶつ}」「白河歌念仏^{しらかわうたねんぶつ}」(中通り地方)、「じゃんがら念仏」(浜通り地方)の6種類の念仏芸能が伝承されており、その所在地が確認された。

(3) 念仏芸能の概要

① 会津大念仏

会津大念仏は、お年寄を中心に各部落ごとに組織された「念仏撰取講^{せつしゅこう}」というグループを母体とした法要の儀式として、会津盆地一円に伝承されている。

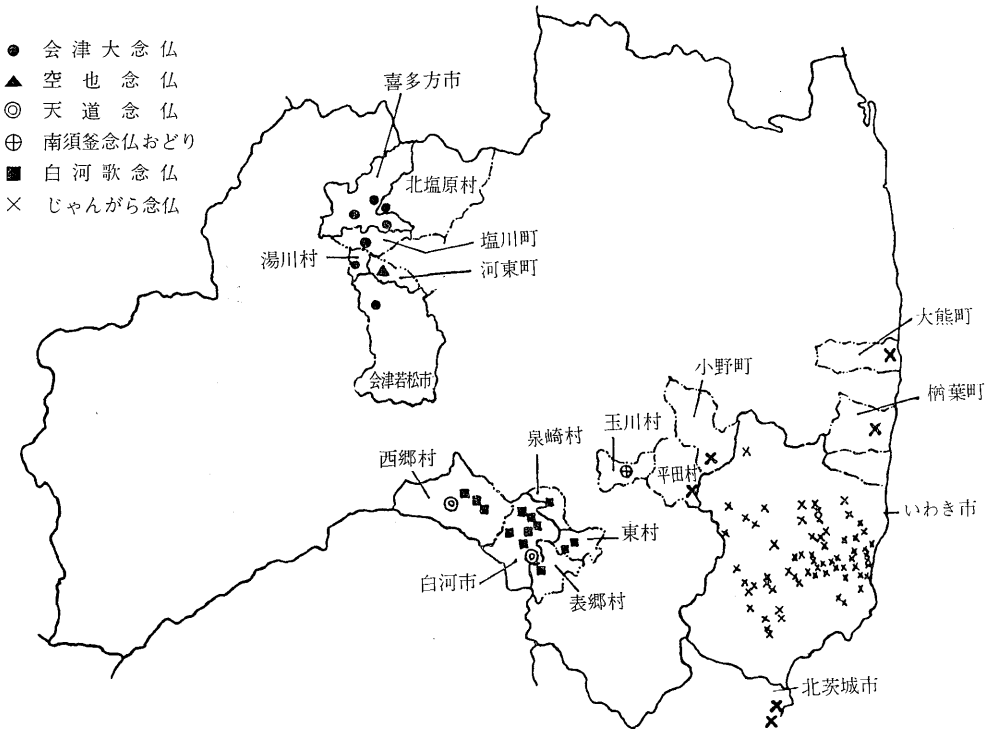
会津盆地は古代から文化が栄え、特に仏教文化の高さについては東北地方では平泉と並ぶ屈指のものと評価されているところである。⁶⁾「会津新編風土記⁷⁾」や各地に残る念仏供養塔などによると、文化文政期には盛んに念仏が行なわれていたらしい。現在の念仏撰取講は、明治7年会津に千人講を結成したことに発し、明治33年に今の組織に編成された。

本研究では、喜多方市熊倉町小沼^{きたかたし くまぐらまち おぬま}に伝承されているものを主な研究対象とした。

会津大念仏は、寺の本堂に座って念仏を唱和する「内念仏^{うちねんぶつ}」と屋外に出て太鼓を打ち鳴らしながら踊る「外念仏^{そとねんぶつ}」との2部から成っている。「内念仏」は細かく形式が定められており、経文や念仏、御詠歌、あるいは回向文^{えこうもん}という一種のシュプレヒコールのようなものまでを含み、変化

图 1

念 仏 芸 能 の 分 布



に富んだ構造となっている。「外念仏」の踊りは女性による素朴で優雅なもので、男性による（最近では女性も参加している）力強くリズムカルな太鼓と対称をなしている。他に楽器は笛と鉦が入り、即興的な道化の踊りが入ることもある。

「内念仏」「外念仏」ともに人数制限はなく何人でもできる。衣裳は「内念仏」は普段着のままで、「外念仏」はそろいの着物を着けて行なわれる。(写真1)

② 空也念仏

空也念仏は、会津の高野山といわれる霊地、河東町冬木沢の八葉寺に伝わり、^{かわひがしまちふゆきざわ} ^{はちようじ}「高野まつり」の行事として8月5日境内にある空也堂の前で行なわれているものである。

以前八葉寺には別な念仏踊りが伝えられていたといわれるが廃絶し、その後大正10年に東京の空也念仏講中の人々によって新たに踊りが伝承された。従って、現在行なわれている念仏踊りは土着的なものとはいささか性質を異にしていると思われる。現在では、冬木沢部落の住民が「空也光陵会」を結成してこれを継承している。

空也念仏は、経文の唱和、和讃の唱和、念仏踊りの順に行なわれる。演者は全員頭巾をかぶり袈裟、脚半を着け、鹿角の錫杖を持った導師1名、瓢2名、太鼓2名、鉦4名（含女性2名）から構成されている。経文・和讃の唱和は導師を先頭にそれぞれの楽器が向かい合った2列の体形で行なわれ、最後の念仏踊りは円形で時計回りに回りながら踊られる。（写真2）

③ 天道念仏

天道念仏とは、「天道」すなわち太陽を念じ害虫を駆除し五穀豊穡を祈願する念仏芸能である。全国的には北関東地方に数多く伝承されている。この芸能の起源は定かではないが、「奥州白河

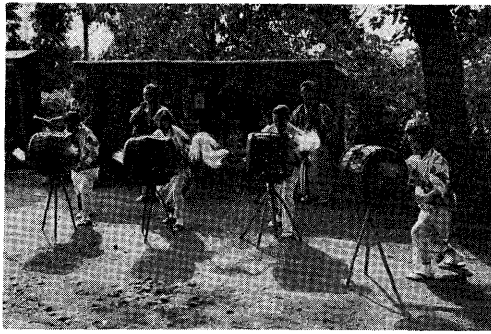


写真1 会津大念仏



写真2 空也念仏



写真3 天道念仏



写真4 南須釜念仏おどり

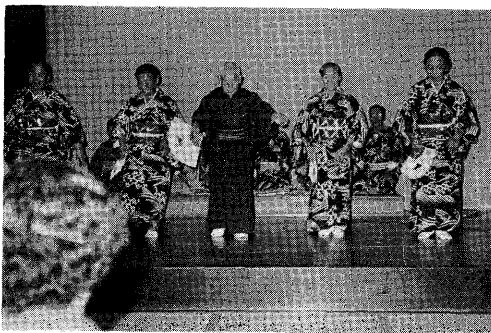


写真5 白河歌念仏



写真6 じゃんがら念仏

風俗問状答」(文化11年)によれば、文化文政期には白河地方で盛んに行なわれていたらしい。⁸⁾

現在県内では白河市関辺しろかわしせきべと西郷村上羽太にしごうむらかみはぶとに伝わっているが、本研究では後者を研究対象とした。

西郷村上羽太の天道念仏は、田植終了後、青年会会員によって上羽太公民館の庭で行なわれている。

まず神主による「神儀」の後、念仏踊りとなる。念仏踊りは「軽い沢」「十二あぐ」「竹島」「そばまき」「ふん返し」「団扇太鼓」の順に行なわれ、その後、太鼓の曲打ちが入る「豊年太鼓」が行なわれる。最後にもう一度「軽い沢」が踊られると突然太鼓が連打され、演者は全員近くの神社まで疾走し、踊りと供物を神社に奉納して終了となる。

衣裳は、そろいの浴衣にたすき、鉢巻、素足で踊られる。(写真3)

④ 南須釜念仏おどり

南須釜念仏おどりは玉川村南須釜に伝承されている。これは女の子が美しく飾った花笠をかぶり振り袖を着て踊る華麗な念仏踊りであるため、別名「花笠念仏おどり」ともいわれている。

4月3日の薬師様星祭には南須釜の東福寺境内で、8月14日の盂蘭盆には新盆にあたる各民家を回って行なわれる。

この踊りは、毎月老人たちによって行なわれていた「月念仏」の一部を、子どもたちに仕度をさせて踊らせたことに始まったといわれている。⁹⁾現在の踊りは、長い間中断されていたものを大正4年大野ケサ女の踊られた記憶によって再興したものである。

上演の形式は、まず「道行き」によって踊りながら庭に入り、次に扇を持って立って踊る「立ちおどり」、続いて綾竹を持って座って踊る「座おどり」が行なわれる。「立ちおどり」には「さ夜の中山」から「下妻」まで9種類、「座おどり」には「さ夜の中山」「ねずみ」「小かじ」の3種類の演目があり、「道行き」も含めてすべて1列になって踊られる。それぞれの演目で歌われる歌は、たいへん長いものであるため、その場に応じて省略している。

踊り手はすべて6～12歳の少女、歌い手は中年以上の女性が担当し、歌の伴奏の鉦と「道行き」に奏される笛は男性が受け持っている。(写真4)

⑤ 白河歌念仏

白河歌念仏は、お年寄を中心に各部落ごとに結成されている「組」を伝承母体として白河地方一円に伝承されている。行なう日時、場所については特に規定がなく、寺や温泉宿などどんな場所でも、またあらゆる集会に座興として歌い踊られるので、別名「お座敷念仏」ともいわれている。また、白河市根田では特に安珍清姫が歌われるところから「安珍歌念仏踊り」ともいわれる。

由来は不明であるが、毎月行なわれていた「供養念仏」の後半が分化し、今日の形になったと説明されている。¹⁰⁾現在では白河市の成田山円養寺が中心となって「奥州白河念仏振興会」が結成され、その保持、振興につとめている。

現在伝承されている「かぐやま」「くさかり」など28種すべての演目は、テンポの遅い「親節」、テンポの速い「旨編」「流し」の3部から構成されている。「旨編」と「流し」の踊りと歌の節はいずれの演目にも共通であるが、「親節」だけは演目によって異なる。上演時の演目の順序や数に規定はなく、各部落ごとに随時工夫して行なっているようである。この踊りも一つの歌がたいへん長いので、普段は省略して行なわれている。

楽器は鉦と太鼓が入り、踊り手や歌い手の人数や性別の制限もなく、服装も自由である。(写真5)

⑥ じゃんがら念仏

じゃんがら念仏は新仏供養の盂蘭盆の行事としていわき地方一円に伝承され、新盆の家を一軒ずつ回りながら青年たちが夜を徹して歌い踊るといものである。

一般には、貞享・元禄の頃、祐天上人がこの地方の人々の信仰が乏しいのを嘆いて、仏教の普及と娯楽とを目的に念仏に節をつけて歌にし、民衆が面白おかしく歌い踊れるように創りかえたのが起源といわれている。その他諸説があるが、現在民俗学者の間では、お年寄によって行なわれていた「月念仏」から分化、発展したという説が有力である。

現在72の地域に伝承されており、本研究ではいわき市小川町^{なて}館のものを主な研究対象とした。

上演形式は、まず「街道ならし」で太鼓や鉦を打ち鳴らしながら家の庭に入り、代表が焼香をする。次に端唄と念仏とを交互に歌いながら踊る「どたら」、太鼓の曲打ちを中心とした強烈な鉦と太鼓のリズムセッションである「ぶっつけ」と続く。その後再び「街道ならし」で庭を出て次の家へと向かうというものである。

人員構成は、提灯持ち1名、太鼓3名、鉦10名前後というのが一般的であり、主に青年男子が行なう。衣裳はそろいの浴衣にたすき、鉢巻、手甲を着ける。(写真6)

Ⅲ 現存する6種の念仏芸能の芸能比較分析

前項では福島県および県下に現存する念仏芸能について概観した。ここでは主に舞踊学的手法を用いて、全体構成、念仏および念仏歌、踊りの振りと構造、太鼓の技法の4つの観点から、6種の念仏芸能の芸能を比較分析した結果と考察について述べる。

(1) 全体構成

それぞれの念仏芸能の大まかな上演形式、空間構成、人員構成については前項で簡単に触れた。

まず、空間構成、人員構成については、参加する人数が多少増減しても支障をきたすことなく、また行なわれる場所の広さや条件が変化してもその場の状況に合わせて柔軟に対応できるという柔軟な構造が、6種の念仏芸能に共通して見られた。

しかしここでは、さらに芸能の性質をより明確に捉えるために、独自の構造分析を行なった。

まず、芸能の表現要素の中から、①音声表現(念仏や念仏歌、掛け声など)②身体表現(踊り、動作)③鳴り物による表現(太鼓、鉦、笛など)に着目し、それぞれの芸能について要素配分を試みた。念仏芸能はその成立の過程において、地域土着の発想や美意識、表現原理などが仏教や念仏のスタイルと融合し、その融合の度合いによって芸能の多様性が生まれたと思われる。そこ

図2 芸能の表現要素からみた構造比較

| 地方 | 会 津 地 方 | | 中 通 り 地 方 | | | 浜通り地方 |
|-------|--|---|---|---|---|---|
| 名称 | 会津大念仏 | 空也念仏 | 天道念仏 | 南須釜念仏おどり | 白河歌念仏 | じゃんから念仏 |
| 儀式的傾向 | 内念仏 (1) 普門 (2) 三尊 (3) 三尊 (4) 数仏 (5) 数仏 (6) 十念 (7) 回向文① (8) 回向文② (9) 回向文③ (10) 回向文④ (11) 光明 (12) 念仏 (13) 念仏 (14) 念仏 (15) 回向文⑤ (16) 回向文⑥ (17) 回向文⑦ (18) 回向文⑧ | (1) 普門 (2) 三尊 (3) 三尊 (4) 数仏 (5) 数仏 (6) 十念 (7) 回向文① (8) 回向文② (9) 回向文③ (10) 回向文④ (11) 光明 (12) 念仏 (13) 念仏 (14) 念仏 (15) 回向文⑤ (16) 回向文⑥ (17) 回向文⑦ (18) 回向文⑧ | (1) 普門 (2) 三尊 (3) 三尊 (4) 数仏 (5) 数仏 (6) 十念 (7) 回向文① (8) 回向文② (9) 回向文③ (10) 回向文④ (11) 光明 (12) 念仏 (13) 念仏 (14) 念仏 (15) 回向文⑤ (16) 回向文⑥ (17) 回向文⑦ (18) 回向文⑧ | (1) 普門 (2) 三尊 (3) 三尊 (4) 数仏 (5) 数仏 (6) 十念 (7) 回向文① (8) 回向文② (9) 回向文③ (10) 回向文④ (11) 光明 (12) 念仏 (13) 念仏 (14) 念仏 (15) 回向文⑤ (16) 回向文⑥ (17) 回向文⑦ (18) 回向文⑧ | (1) 普門 (2) 三尊 (3) 三尊 (4) 数仏 (5) 数仏 (6) 十念 (7) 回向文① (8) 回向文② (9) 回向文③ (10) 回向文④ (11) 光明 (12) 念仏 (13) 念仏 (14) 念仏 (15) 回向文⑤ (16) 回向文⑥ (17) 回向文⑦ (18) 回向文⑧ | (1) 普門 (2) 三尊 (3) 三尊 (4) 数仏 (5) 数仏 (6) 十念 (7) 回向文① (8) 回向文② (9) 回向文③ (10) 回向文④ (11) 光明 (12) 念仏 (13) 念仏 (14) 念仏 (15) 回向文⑤ (16) 回向文⑥ (17) 回向文⑦ (18) 回向文⑧ |
| | 太鼓なし | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり |
| 芸能的傾向 | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり |
| | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり | 太鼓あり |

で次に、芸能の中で仏教などにおける宗教的儀式の形態をほぼそのままの形で伝承している部分を「儀式的傾性」、宗教性が薄く舞踊的、音楽的表現が中心となっている部分を「芸能的傾性」と呼ぶことにし、さらに「芸能的傾性」を太鼓芸の有無によって二分し、それぞれの念仏芸能の各部分要素を対応させた。その結果は図2に示すとおりである。

この図から、各念仏芸能の性質と地域による差異を見ることができよう。

まず、会津地方に伝わる会津大念仏と空也念仏は、ともに音声表現（念仏の唱和）を中心的な表現要素とし儀式性を強く残した演目が前半に行なわれ、後半に踊りや太鼓が入った芸能性の高いものが演じられるという2部構成になっていることが明らかとなった。また、中通り地方の天道念仏、南須釜念仏おどり、白河歌念仏は、天道念仏がわずかに神儀を行なっている他は儀式的傾性と呼ばれる部分はなく、念仏歌や踊りが華やかに展開されている。さらにいずれの念仏踊りも数多くの演目が伝承されているという共通点も見られた。そして浜通り地方のじゃんがら念仏も、中通り地方のものと同様に儀式性を強く残してはいないが、この芸能は鳴り物（太鼓と鉦）の表現が中心的な表現要素となっているところが特徴といえる。

しかし、文献によれば、現在では儀式的な部分を持たない白河歌念仏も、昭和30年代までは会津大念仏の「内念仏」に相当する「供養念仏」が踊りの前に行なわれていたという記録が残っている¹¹⁾。また、じゃんがら念仏の原形と見られている「月念仏」（昭和30年代後半消滅）でも、「内念仏」に類似の「回向念仏」を行なってから、のちに現在のじゃんがら念仏になったといわれる「立念仏」が行なわれていたことが判明している¹²⁾。

このことから考えると、福島県における念仏芸能の基本構造は、会津大念仏のように前半が念仏や経文・和讃の唱和を中心としたパート、後半が歌や踊り・太鼓芸が華やかに展開するパートという2部構成であったといえるのではないだろうか。そして次第に前半部分が省略され、現在伝承されている形に変容したのではないかと考えられよう。

（2） 念仏および念仏歌

まず、念仏および念仏歌の内容について、地域ごとの特徴を見てみよう。

会津地方に伝わる会津大念仏と空也念仏では、「香偈」^{こうげ}「三宝礼」^{さんぼうらい}などの経文や念仏（南無阿弥陀仏）、和讃といったものが歌われている。これに対し、天道念仏、南須釜念仏おどり、白河歌念仏の中通り地方に伝わるものは、歌の途中あるいは最後に「南無阿弥陀仏」の六字名号が挿入されるものの、歌の内容は仏教には関係のない男女の恋愛や親の仇討ちなどを題材とした語り物である。これらの物語は歌詞の内容から考えて関東地方から伝わったものと見られている。さらに浜通り地方のじゃんがら念仏になると、六字名号さえ「ナーハーハイ モーホーメーヘー」という言葉に変容し、この念仏と端唄が交互に歌われている。端唄は、土地の名物や日常生活そのものに題材を取っている。

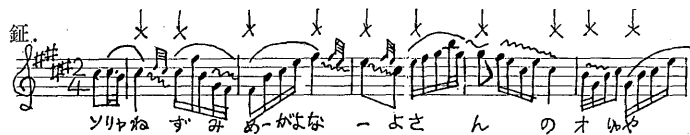
このように歌の内容については、地域ごとの明確な相違を見ることができた。

次に、歌の節については、いづれも誰にでも歌える簡単な旋律であることがわかった。しかし、多くは踊り手が歌いながら踊るのに対し南須釜念仏おどりと白河歌念仏は踊り手と歌い手が分化しており、そのためか、細かく小節が入ったやや複雑な節回しとなっている。またほとんどの念仏歌がユニゾンで歌われるのに対し、会津大念仏の経文は旋律に任意性がありハーモニーを有するという点も、音声表現の面から注目されよう。（図3）

さらに歌の形式は、句頭あるいは音頭と全員との掛け合い、または太鼓の打ち手と踊り手との掛け合いというような掛け合いの形が多く取られている。これは音楽上の効果だけでなく、お互いの協同性を高める点において重要な役割を果たすのではないかと考えられる。

図3 念仏および念仏歌

— 南須釜念仏おどり「ねずみ」—



— 会津大念仏「香燭」—



(現地録音したものより採譜)

(3) 踊りの振りと構造

ここでは、6種の念仏芸能について踊りの構造分析をもとに考察していこう。

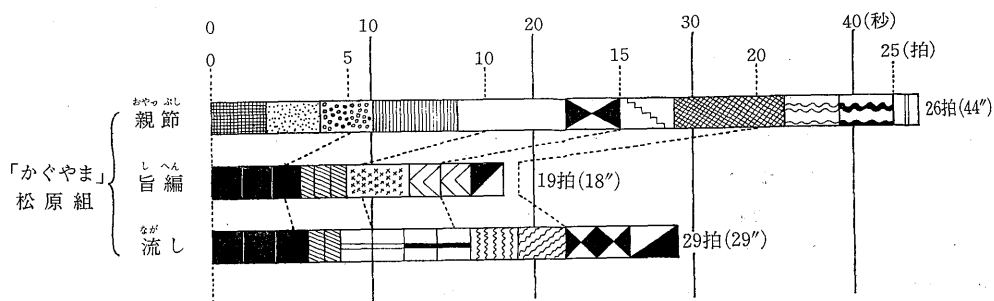
まず会津地方について見ると、会津大念仏の「外念仏」で踊られる踊りは、両手を横に出しては戻すという2拍からなる動作の繰り返しであり、空也念仏の念仏踊りは、足を大きく踏み出しては楽器を叩くというこれも2拍からなる単純な動作の繰り返しである。また、浜通り地方のじゃんがら念仏の「どたら」の踊りも、2歩前進しては2歩下がり横に進んで鉦を叩くという6拍

の動作の繰り返しである。それに対して中通り地方の天道念仏、南須釜念仏おどり、白河歌念仏は、一つの繰り返しのフレーズが長く(8~34拍)構造も複雑になっており、踊りの演目も数多く伝承されている。大まかに見れば、会津地方、浜通り地方の念仏芸能が舞踊的に単純・素朴であるのに対して、中通り地方のものはより複雑化・高度化しているといえよう。

中通り地方に伝わる三者をさらに比較すると、まず天道念仏は一つの踊りのフレーズの中で姿勢や視線の高さがダイナミックに変化するという特徴がある。また動作の中には稲刈りや石臼ひきのような農作業の模倣が見られる。これはこの芸能が農業に深くかかわっていることの現れとみることができよう。次に、南須釜念仏おどりは全体的な盛り上がりには乏しいが、動作の種類が多く扇を生かした動作にその特徴を見ることができる。そして白河歌念仏は、28種類それぞれの踊りが「親節」「旨編」「流し」と構造・テンポを変化させて追い込む「序破急」の形式が特徴である。(図4)

6種の念仏芸能の舞踊全体を見ると、中には天道念仏の高さの変化、白河歌念仏のテンポの変化によるダイナミックな表現も見られるが、総じてスタティックな性格を持つといえよう。しかしそれぞれの念仏踊りは、今回十分に分析することはできなかったが、踊り手の性別や年齢その

図4 白河歌念仏の舞踊の構造(一つの記号は一つの動作を表わす)



他の条件を背景に、独自の味わいというものを伝承していることを付け加えておきたい。

(4) 太鼓の技法

福島県下の念仏芸能では、南須釜念仏おどりを除いたすべてに太鼓が使われている。それぞれの芸能の中で太鼓は、芸能の進行を司どる、歌や踊りのテンポを定める、全体を盛り上げるなど重要な役割を担っている。中でも音楽的にも視覚的にも変化に富み、高度な技術を要する太鼓の「曲打ち」は、芸能の見せ場の一つでもある。ここでは、会津大念仏の「外念仏」、天道念仏の「豊年太鼓」、じゃんがら念仏の「ぶっつけ」の中で行なわれている曲打ちに焦点を絞って述べてい

まず、太鼓自体については三者とも締め太鼓を使用している。太鼓を置く位置については、会津大念仏では三脚のような台に乗せて胸の前に置き、天道念仏では腰に縄で縛り、じゃんがら念仏では腰から紐で吊して膝の上に乗せる。太鼓の位置が下になるにつれて太鼓の大きさは小さくなっているが、いずれも太鼓を横にして両側から両手で打つという点は共通している。また、会津大念仏とじゃんがら念仏の太鼓の撥には共通して白い毛が付いており、これは仏具である払子^{はっす}が変形したものと見られている。(写真1, 3, 6)

次に、それぞれの太鼓芸の特徴を述べよう。

会津大念仏の「外念仏」の太鼓は、比較的テンポがゆっくりでリズムも単純である。この太鼓の第一の特徴は、太鼓の13のリズムパターンに「三三九度」^{さんさんくど}「車」^{ぐる}「千鳥」^{ちどり}など名前が付いており、それぞれに仏教的な意味を持っているということである。たとえば「三三九度」は「九品浄土を表し不動明王が守り、一心経礼萬徳円満積という撥なり」¹³⁾という具合である。また、歌のかわりにリズムパターンの名称を巧みに組み込んだ掛け声が入り、音楽的効果を高めるだけでなくパターンの順序を覚えやすいように工夫されている。(図5) 舞踊的には、¹³⁾ところどころで撥を回したり太鼓の上に撥を立てるなどの動作も入り、視覚的にも楽しめるものとなっている。

天道念仏の「豊年太鼓」は、端唄と太鼓の曲打ちが交互に行なわれるものである。太鼓の曲打ちのリズムはリズムカルでテンポが速く、基本的に「たっかたっか」(楽譜上 ♪♪ あるいは ♪_3) というリズムと、「たーんた」(楽譜上 ♪) のリズムが組み合わせられてリズムパターンが構築されている。(図6) 舞踊的動作はあまり入らないが、太鼓を持った4人が向かい合い、1～2歩前進したり後進したりしながら太鼓を叩く。

図5 会津大念仏——「外念仏」の太鼓——

♩ = 94

♪ 右手
♪ 左手

太鼓 右面
太鼓 左面
(掛声)
鉦

あらありかりたりなむみだぶつ。(はあいはい)は
はい (1) はい
はい (2) はい
はい (3) はい

とーいはい あいはい (3) 太鼓 あいはい

(数回くり返し)

もりやばな (4) 太鼓 (5) 金鼓 (6) 車 (7) 車鼓 (後略)

(現地で録音したものより採譜)

じゃんがら念仏の「ぶっつけ」の太鼓は、「たたんたたん」というリズムを基調に、様々なリズムのバリエーションを挿入しながら最後は「雷落とし」と呼ばれる激しいクライマックスに追い込んでいくというものである。リズムに伴う撥さばきも複雑でダイナミックであり、最後の「雷落とし」を打てるようになるには高度な技術と年期を要する。本研究では、太鼓打ちの技術

図6 天道念仏——「豊年太鼓」——



という方法で伝えられていることがわかった。また、じゃんがら念仏で最も重要とされていることは、何よりも3名の太鼓と10名前後の鉦のリズムと動きが全員一体となることであり、そのために「ハナ太鼓」という制御回路を設けて全体をコントロールしていることも明らかとなった。

Ⅳ 地域社会と念仏芸能の伝承との関係

前項では、念仏芸能の芸能態を様々な局面から捉え比較分析を試みた。しかし芸能のもつ性質を把握するためには、芸能それ自体を研究の対象とするだけでなく、芸能と芸能を取り巻く諸要素との関係を見ていく必要がある。ここでは、芸能を伝承している組織をも含めた地域社会と芸能伝承との相互作用に着目した。三地域からの代表として会津大念仏、天道念仏、じゃんがら念仏を選び、以下に地域社会と芸能伝承との関係についてそれぞれ論述する。

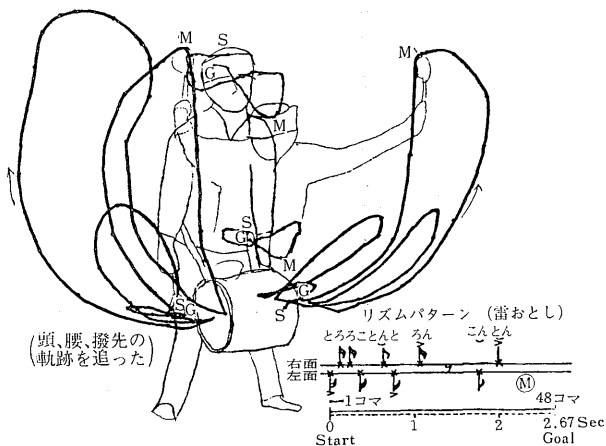
(1) 会津大念仏伝承の場合

① 会津大念仏摂取講について

会津大念仏の母体である「会津大念仏摂取講」は、会津地方の各部落ごとに結成された念仏講の「組」が基本単位として組織されている。昭和43年には24組、365名の講員を擁していたが、現在実際に活動しているのは6組にすぎない。各組には「大世話人」「中世話人」「常世話人」と呼ばれる世話役と「顧問」が置かれ、普段の活動はこの組ごとに行なわれている。

この各組を調整し、摂取講全体の活動の推進役となるのが、摂取講「大世話人」であり、この

的特性を明らかにするためにフィルム分析を試みた。(図7)その結果、桴の軌跡が大きいこと、強打する前にためをつくること、腰でリズムをとることなど、太鼓打ちのポイントを把むことができた。さらに現地取材で得られたこととして、じゃんがら念仏の伝承の場では、太鼓のリズムパターンはすべて「とろろことん」というような口太鼓で伝えられ、動作は先輩の後ろについて徹底的にコピーする

図7 じゃんがら念仏——「雷落とし」の動作分析——
(フジメモモーションMA-60による)

役は明治33年の撰取講結成当時から、代々喜多方市熊倉町の小沼組のメンバーが担当することになっている。また、撰取講の指導役として「総長」「副総長」が置かれており、総長には代々会津若松市大町にある自然山融通寺住職が就任している。

このように、仏教の専門的立場にいる寺の住職を指導役としてその長に置き、会津地方全体で会津大念仏撰取講という一つの組織にまとまっていることは、会津大念仏が儀式的、宗教的性格を色濃く残し、今日まで古態をほとんど変容せずに伝承されている大きな要因の一つといえるのではないだろうか。

② 小沼組における会津大念仏の伝承

小沼部落は喜多方市郊外にあり、磐梯高原の麓に広がる農村地帯である。小沼組の根拠地・往生山安養寺は、現在では専任の住職もいない小さな寺であるが、会津大念仏の本山として撰取講の事務局が置かれ撰取講総組の中で最も盛んに行なわれているところである。

現在、小沼組の講員数は約50名で、50代から80代までの男女によって構成されている。講員の資格や規制は一切なく、小沼に住む人ならば宗派の別なく誰でも参加できる。

小沼組が単独で定期的に行なうのは、2月16日、3月15日、春の彼岸、8月16日、秋の彼岸、11月10日である。それぞれ安養寺で行なうが、年2回の彼岸には特に部落全戸を一軒ずつ回って行なっている。また、小沼組だけでなく撰取講総組が集まって行なうものには、4月20日頃と10月20日頃融通寺で催される「修行会」と、8月30日安養寺における「小沼組道場念仏」とがある。さらにこれらの定期的な集会の他に、部落内の葬式や法要、他の地域からの供養の依頼などがあればその都度臨時的に行なっており、年間の実施回数は相当の数に登っている。

これらの行事は念仏による供養を目的としたものではあるが、娯楽としての要素を多分に含んでいることも見逃せない。たとえば融通寺での修行会の後は、春は花見、秋は紅葉見物が恒例となっており、また東山温泉から度々依頼される祈願供養では温泉に入る楽しみもある。さらに普段の小沼組だけの集まりでも、念仏の後は各自が食べ物を持ち寄って飲食し歓談するという場が必ず設けられている。このように、会津大念仏は、地域社会の中で仏を供養して地域に奉仕するという役割の他に、お年寄の日常的な楽しみ場として大きな役割を果たしているといえよう。

(2) 天道念仏伝承の場合

① 西白河郡西郷村の天道念仏

天道念仏について述べる前に、西郷村について簡単に触れておこう。西郷村は中通り地方の南端に位置し(図1)、¹⁵⁾ 甲子高原に広がる農村である。米の単作地帯であり、古くは馬の産地として知られていたが、今日では関東との接点という地の利から京浜地方のリゾート地として注目を集め、観光その他の開発が急速に進められている。

西郷村ではかつて14部落において天道念仏が行なわれていたことが知られている。これらの多くは昭和初期まで存続していたが第二次世界大戦で一時停止し、戦後は上羽太、下羽太、¹⁶⁾ 追原、¹⁵⁾ 長坂の4部落に残った。しかし昭和35年頃に長坂、40年頃に下羽太、追原で取りやめとなり、現在では上羽太にのみ伝承されている。

このように近年、西郷村の各部落では、天道念仏だけでなく様々な伝承が消滅しつつある。その背景として、戦後の開発に伴う地域共同体の急速な変容が指摘されている。

② 西郷村上羽太における豊作祈願の部落行事としての天道念仏

では、現在上羽太部落ではどのようにして天道念仏が行なわれているのだろうか。

天道念仏は、田植終了後の一連の部落行事の一つである。青年が宮ごもりをして産土神に田植終了の報告をする「オコモリ」、農林日である「サナブリ」に続き、豊作祈願の祭りとして最後

に行なわれる。現地での調査の結果、この天道念仏は独自の信仰形態を持つことがわかった。具体的には、念仏でありながら神道との結びつきが深い神仏混淆の形、日天・月天を象徴した飾り物、桔梗の花と稲穂とを表し魔除けとして部落全戸に配られる飾り花、餅つき臼と梯子で四方を固め穀殻を敷いた庭の設定（写真3）などが独自のものとしてあげられよう。

また、部落行事として地域社会と深く結びついて伝承されていることも明らかとなった。具体的には、宿（天道念仏を行なう場所）が1年ごとに隣の家へ移動する「順回り」制、天道念仏にかかった費用を部落全戸で平等に負担する「差割」制などがあげられる。このような制度は、部落内の家をすべて等しく扱うという平等性重視の発想に基づいたものとして注目される。

② 上羽太青年会の組織と活動内容

最後に、天道念仏の継承組織である上羽太青年会について述べる。

上羽太青年会は、西郷村連合青年会および羽太分会の下部組織として戦後再編成された近代的青年会の一組織でありながら、土着的に育まれてきた若者組としての性格を色濃く残しているという特色がある。まず組織の面から見ると、入会資格が学業終了時から30歳までの長男（家を継ぐ者）であること、近代的青年会としての役員の他に部落行事のマネージャーである「大世話人」「中世話人」「小世話人」という役を置いていることなどが、他の青年会に見られない特徴としてあげられる。また活動内容も、レクリエーションを主体とした近代的青年会としての活動の他に、天道念仏をはじめとする様々な部落行事の執行が大きな位置を占めていることも見逃せない。年中行事や祭り・芸能の伝承は、全国的に見ても、消滅、あるいは保存会の手で行なわれる傾向にあり、神社の祭礼など年間8つもの伝統的な行事を青年会が担っている上羽太部落のような例はまれといえよう。

西郷村の各部落から次々と天道念仏の姿が消えたのに対し、上羽太にのみ伝承されている要因には、旧来の若者組の姿を維持している青年会の存在が大きく作用していることがあげられるのではないだろうか。

（3） じゃんがら念仏伝承の場合

ここでは、昭和53年いわき市教育委員会が行なった「じゃんがら念仏実施状況調査」¹⁸⁾と、筆者の行なった現地調査をもとにじゃんがら念仏の伝承について述べる。

① じゃんがら念仏の実施状況

昭和53年現在、じゃんがら念仏は72の地域に伝承され、いわき市を中心に近郡諸地域あるいは茨城県北部にまで分布している。（図1）これらの伝承地域の分布を見ると、市街地や漁村には伝承されておらず、ほとんどが農村・山村地帯に分布している。

じゃんがら念仏が行なわれるのは、主に8月13日から15日の盂蘭盆である。この期間は新仏供養の行事として新盆の家を一軒ずつ回って行なわれ、地元部落だけでなくじゃんがら念仏が伝承されていない地域の家も回って行なわれている。まず地元部落では、新盆の家ならば宗派にかかわらず一軒ずつすべてを回る。そのため新盆の軒数が多い場合には、午後から回り始めて夜中あるいは明け方までかかることもあるという。一方地元以外の地域では、あらかじめ依頼があって訪ねる場合を除いては市街地の通りを流して歩き、新盆の家に出会ったところで供養するという形を取っている。そのため盂蘭盆の期間、市街地の新盆の家には様々な部落からの団体が訪れ、じゃんがら念仏の競演が繰り広げられる。しかし地元以外の地域での供養は一種の出稼ぎであり、地元部落の家を常に優先し、丁寧に2回ずつ行なうなど地元重視の姿勢が見られた。

この他、じゃんがら念仏は、寺院の縁日や盆踊り大会、運動会や種々の観光事業のアトラクションとしても盛んに行なわれている。

② じゃんがら念仏と青年会

じゃんがら念仏を伝承している72の地域のうち、52の地域では青年会によって継承されている。ここでは青年会活動におけるじゃんがら念仏の占める役割について見てみよう。

まず青年会にとって、じゃんがら念仏を行なって供養の謝礼としてもらう金額が大きな財源となっていることが注目される。多いところでは3日間で50万円にものぼり、その他に観光事業やテレビへの出演料が臨時的に入ることもある。宗教上の奉仕活動でありながら、じゃんがら念仏は青年会の活動資金を確保するための一種のアルバイトとしての性格をも持つといえよう。

しかし、じゃんがら念仏はあくまでも新仏供養のための行事であり、地域への奉仕活動として行なわれている。青年会の活動内容がレクリエーション中心となり実質的な地域への奉仕活動が消えつつあるといわれる現在、じゃんがら念仏は地域と青年会とを結ぶ数少ない絆となっているといえる。

さらに、じゃんがら念仏が青年会の結束を固める役割を果たしていることも見逃せない。各青年会では本番のほぼ1か月前から練習を行っており、この期間は毎日のように会員が顔を合わせる。お互いをよく知り、仲間づくりを集中的に進められる絶好の機会といえよう。

以上のようにじゃんがら念仏は、青年会の地域社会への奉仕、活動資金の調達や仲間づくりといった局面において重要な役割を果たし、青年会活動の活性化に大きく貢献しているといえよう。

しかしながら、じゃんがら念仏は今日まで順調に継承されてきたわけではなく、会員不足などを理由に一時中断された時期もあった。その時期は昭和30年代から40年代前半にかけてであり、40年代後半から50年代にかけて復興するという傾向がいくつかの部落に共通して見られた。こうした衰退の背景には近代化に伴う村の構造の変化が、復興の背景には48年のオイルショック²⁰⁾以来の価値観の転換、ことに伝統への再評価などが大きな要因として指摘されている。

V 総 括

本研究は、「地域社会における祭りや郷土芸能の復興と再創造」をめざし、福島県の念仏芸能について独自の視点から論述してきた。ここで本研究によって得られた成果と今後の課題についてまとめた。

福島県下には現在6種の念仏芸能が伝承されており、その分布は会津、中通り、浜通りの三地方にわたっている。

芸態については、様々な局面からの分析の結果、①会津地方のものは宗教的色彩が濃く仏教の儀式の形態をそのままの形で伝承しているが芸能的には素朴である ②中通り地方のものは歌(語り物)と踊りが高度に芸能化されている ③浜通り地方のものは打楽器による表現、特に太鼓の高度な技法に特色がある、というそれぞれの地域の特徴を抽出することができた。このような地域差というものは、その地域独自の自然環境や社会的・文化的環境を反映していると考えられる。たとえば、会津地方における盆地という閉鎖的な自然環境や高度な仏教文化、中通り地方における関東地方との文化交流などは、芸態の形成に何らかの影響を及ぼしているのではないだろうか。

また、芸態の共通性として、①儀式性の強い部分と芸能性の強い部分との2部からなる念仏芸能の基本構造 ②人員構成および時間・空間構成の柔軟性 ③念仏および念仏歌における掛け合いの形式 ④締め太鼓の使用とその打法などを明らかにすることができた。

さらに、地域社会と芸能伝承との相互作用に着目し、会津大念仏、天道念仏、じゃんがら念仏の三者について比較考察した結果、①会津大念仏は地域社会の仏教行事を支え、念仏撰取講は老人の娯楽の場となっている ②天道念仏は民間信仰と深くかかわり部落行事として地域社会と密

接に結びついて伝承されている ③じゃんがら念仏は新仏供養の行事として地域と深くかかわる一方、青年会を維持・活性化する重要な役割を担っている、というような芸能伝承と地域社会との関係が明らかにされた。同時に、三者の共通点として、①地域信仰とかかわりをもち地域社会の年中行事として伝承されている ②地域住民が平等に利益をこうむるあるいは平等に負担を負うという地域全体の平等性重視の発想が見られる ③昭和30年代から40年代にかけて開発の影響によると思われる芸能伝承の衰退が見られる ④芸能の伝承を媒介とした仲間づくりが行なわれている、ということを見出すことができた。特に仲間づくりという点については、さらに規模を拡大して芸能伝承を媒介とした新しいコミュニティの創造というものが期待できるように思われる。

以上のように、本研究では福島県の念仏芸能について様々な情報を把握することができた。しかし、筆者が野外調査において直に感じた芸能の魅力や固有性というものが十分に分析・検討されたとは言い難い。

なぜならば、芸能というものは舞踊・音楽・演劇・造形といったあらゆる諸要素が渾然一体となって存在し、その情報伝達媒体は多岐にわたり、多元的で総合的な性格を持つものである。そのため、芸能を要素ごとの次元に解体して分析するという従来の方法では、分析のための座標軸を無限に設定しなければならず、また各要素間の相互作用というものが欠落してしまう恐れも多分にあると考えられる。従って、芸能の魅力をつとらえるためには、従来の研究方法以外に新しい研究方法を開拓する必要があると思われる。この点については今後の課題とし、さらに検討を進めていきたい。

最後に、本研究を進めるにあたり御懇切な御指導をたまわりましたお茶の水女子大学教授・松本千代栄先生、筑波大学講師・大橋力先生、ならびに快く取材に御協力いただいた地元の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

(注)

- 1) 山城祥二「情報という環境」季刊『地球』21号、芸能山城組出版局、1980年4月、18—25頁
- 2) 菅田宏、鈴木啓「郷土史事典・福島県」昌平社、1980
- 3) 小林清治、山田舜「福島県の歴史」山川出版社、1970、108頁
- 4) 郡司正勝編「日本舞踊辞典」東京堂出版、1977、306頁
- 5) 文化庁文化財保護部「日本民俗資料事典」第一法規、1969、281頁
- 6) 岩崎敏夫「日本の民俗7・福島」第一法規、1973、18頁
- 7) 古木登「会津大念仏記録」保存会刊行物、1968、4—9頁
- 8) 山口弥一郎他「福島県史」第25巻民俗1、福島県、1964、881頁
- 9) 須釜民芸保存会「南須釜念仏おどり」保存会刊行物、1979、3頁
- 10) 懸田弘訓「ふくしまの民俗芸能」福島中央テレビ、1977、180—182頁
- 11) 前掲書8)、892—894頁
- 12) 柳沼徳実「平の文化財」いわき市教育委員会、1975、178—179頁
- 13) 前掲書7)、17—19頁
- 14) 会津大念仏撰取講総長・矢花昭信氏へのインタビュー(1981.1.3)
- 15) 西郷村史編さん委員会「西郷村史」西郷村、1978、615—653頁
- 16) 西郷村教育委員会社会教育課・森下富夫氏(郷土史家)へのインタビュー(1980.6.7)
- 17) 昭和51年からは住宅様式の変化などを理由にこの制度を廃止し、公民館で行なうようになった。
- 18) いわき市教育委員会「いわきのじゃんがら<昭和53年度若ものによる新しいふるさとづくり事業レポート>」いわき市教育委員会、1979
- 19) 小川町館じゃんがら保存会会長・鈴木一紀氏へのインタビュー(1979.8.14)
- 20) いわき市教育委員会青少年課・鈴木俊氏へのインタビュー(1978.10.2)